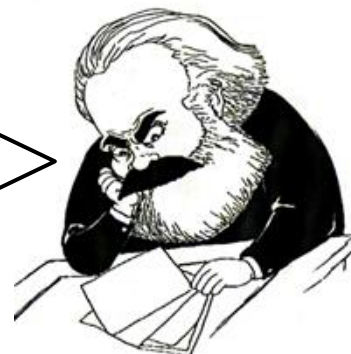


初学者大歓迎!

東京池袋  
『資本論』を読む会  
第1巻学習会

# 価値の形成と保存 これはどのようにし て行なわれるか

生産手段に転換され  
る資本部分は不変資  
本、労働力に転換さ  
れる部分は可変資本  
と呼ばれるのじゃな



5月11日(土)午後6時から9時まで  
西池袋第二区民集会室 豊島区西池袋3-8-20 JR池袋駅西口から徒歩12分

【範囲】 第3篇「絶対的剰余価値の生産」

第6章「不変資本と可変資本」(前半)

\*前回の残り(第5章・第2節「価値増殖過程」の第26段落  
から終わりまで)をやり終えてから第6章に入ります

前回、第5章の第2節「価値増殖過程」をやりましたが、残り4分の1ほど残してしまいました。でも大きな山場を越え、価値増殖のメカニズムが明らかになるところまで進み、あとはこれを概念的に整理する作業が残されているだけです。今回はこれを終えてから第6章「不変資本と可変資本」に入ることになります。

資本家は生産のために生産諸要素として生産手段と労働力を購入します。生産のためにはこのどちらも欠けてはなりません、価値増殖にとってカギになるのは労働力です。労働力の日価値は3シリングで、それは6労働時間分だと想定されました。しかし、このことは資本家が労働者をそれ以上働かせることを妨げません。資本家は労働者に労働力の日価値3シリングを支払い、12時間働かせるならどうなるでしょう。労働力の支出によって形成される価値は6シリングになります。労働時間が増えればその分だけ前貸される生産手段の価値額は増えますが、それは生産手段の量が増えるからです。生産手段は自ら増殖することはできません。労働力の支出によって形成される6シリングの価値と労働力の日価値3シリングとの差である3シリングが剰余価値になります。ここには商品交換の法則の侵害は少しもありません。このことが可能なのは、労働力という商品が「価値の源泉でありしかもそれ自身も持っているよりも大きな価値の源泉だ」という独自の使用価値をもっているからなのです。こうして価値増殖の秘密が明らかになりました。

さて第6章「不変資本と可変資本」の課題は何でしょうか。生産諸要素は労働力と生産手段ですが、これらが資本の成分になります。これら要素は生産物価値の形成にどのような仕方に参加するのでしょうか? これは生産過程で新たな価値がいかにか形成されるかということであり、さらに生産過程で消費された生産手段の価値はどのように保存され生産物価値の成分として再現するかということです。不変資本と可変資本というのは生産物価値の形成に関わる概念で、最も重要で本質的な資本の区分です。

『資本論』は決してやさしくはありません。だから一緒に学ぶ意義があるのです。ともに学びましょう!

＜裏面は前回学習会の報告です。参考にぜひお読みください＞

## 【学習会報告(4月6日実施)】

4月6日(土)に学習会を実施しました。第5章「労働過程と価値増殖過程」の第2節「価値増殖過程」をやったのですが、残り4分の1のところまで時間切れになってしまいました。以下はその報告です。

前節において、生産過程がすなわち労働過程(使用価値の生産として)が考察されました。こんどは価値形成過程として考察されることとなります。

## 第5章 労働過程と価値増殖過程 第2節 価値増殖過程

### 1 生産過程は価値形成過程として考察される

第1篇で明らかにされたように、商品は使用価値と価値の統一物です。使用価値のない商品があり得ないとしても、商品生産者にとって使用価値は自己目的ではありません。「商品生産ではおよそ使用価値が生産されるのは、ただそれが交換価値の物質的な基底、その担い手であるからであり、またそのかぎりでのこと」(原書201頁)でしかありません。

「そして、われわれの資本家にとっては二つのことが肝要である。第一に、彼は交換価値をもっている使用価値を、売ることを予定されている物品を、すなわち商品を生産しようとする。そして第二に、彼は、自分の生産する商品の価値が、その生産のために必要な諸商品の価値総額よりも、すなわち商品市場で彼の代いじな貨幣を前貸しして手に入れた生産手段と労働力との価値総額よりも、高いことを欲する。彼はただ使用価値を生産しようとするだけではなく、商品を、ただ使用価値だけではなく価値を、そしてただ価値だけではなく剰余価値をも生産しようとするのである」(同前)。

まさに価値を生産することが、そして何よりも剰余価値を生産することが資本家の目的なのです。価値ならびに剰余価値がいかに形成されるのか、そのメカニズムを明らかにすることが本節の課題です。

### 2 生産手段の価値について

このあと読み進めるうえで、あらかじめ頭に入れておくことと便利な数字を並べておきます。

1時間労働が形成する価値(価格)=0.5 シリング (6ペンス)
1労働日(12時間労働)が形成する価値=6 シリング
1労働日=12時間労働
労働力の日価値=3 シリング

「どの商品の価値も、その使用価値に物質化されて

いる労働の量によって、その生産に社会的に必要な労働時間によって、規定されている。このことは、労働過程の結果としてわれわれの資本家の手にはいった生産物」(同前)すなわち労働生産物としての生産手段にもあてはまります。「そこで、まず、この生産物に対象化されている労働が計算されなければ」(同前)なりません。

糸(綿糸)の生産(綿紡績)が考察されます。

糸の生産のために、原料として10ポンドの綿花が、労働手段として紡錘1個が必要だとされています。これらは市場で購入されるのですが、すでに価値が与えられています。綿花10ポンドは10シリング、紡錘1個2シリング、合計12シリングです。これらには2労働日が対象化されていることとなります。

「綿花の生産に必要な労働時間は、綿花を原料とする糸の生産に必要な労働時間の一部分であり、したがってそれは糸のうちに含まれている。それだけの摩擦または消費なしには綿花を紡ぐことができないという紡錘量の生産に必要な労働時間についても同じことである」(原書202頁)

ここで言われている「糸の生産に必要な労働時間」とは、綿花と紡錘を用いて支出される最終局面の労働時間ではなく、全局面の労働時間です。これには綿花と紡錘の生産に要した労働時間が含まれます。

「こういうわけで、糸の価値、糸の生産に必要な労働時間が考察されるかぎりでは、綿花そのものや消費される紡錘量を生産するために、最後には綿花や紡錘で糸をつくるために、通らなければならないいろいろな特殊な、時間的にも空間的にも分離されている、いくつもの労働過程が、同じ一つの労働過程の次々に現われる別々の段階とみなされることができるのである。糸に含まれている労働はすべて過去の労働である。糸を形成する諸要素の生産に必要な労働時間は、すでに過ぎ去っており、過去完了形にあるが、これにたいして、最終過程の紡績に直接に用いられた労働はもっと現在に近く、現在完了形にあるということは、まったくどうでもよい事情である。一定量の労働、たとえば30労働日の労働が、一軒の家の建築に必要だとすれば、30日目の労働日が最初の労働日より29日おそく生産にはいったということは、その家に合体された労働時間の総計を少しも変えるものではない。このように、労働材料や労働手段に含まれている労働時間は、まったく、紡績過程のうちの最後に紡績の形でつけ加えられた労働よりも前の一段階で支出されたにすぎないのであるかのように、みなされうるのである。／要するに、12シリングという価格で表わされる綿花と紡錘という生産手段の価値は、糸の価値の、すなわち生産

物の価値の成分をなしているのである」(原書 202-203 頁)

糸という生産物に至るまでに、時間的にも空間的にも分離された、いくつかの労働過程(綿花の生産や紡錘の製造)を経ます。糸の価値にとって、生産諸手段の生産のために支出された労働時間は、実際に支出された時期に関係なく紡績過程の直前に支出された労働時間として見なされます。生産諸手段の価値は与えられたものとして糸の価値に含まれることとなります。



### 3 紡績過程でつけ加えられる価値部分 ——価値形成過程の考察

糸 10 ポンドの生産に綿花 10 ポンドと紡錘 1 個が消費され、前者の価値は 10 シリング、後者の価値は 2 シリング、計 12 シリングで、これには 2 労働日(24 労働時間)が対象化(物質化)されていると仮定されます。

これに紡績労働が加わります。紡績工の労働は、ここでは使用価値の生産としての具体的有用労働としてではなく、まったく別の観点から、つまり抽象的人間的労働の面から考察されます。したがって労働の量だけが、労働時間だけが問題になります。勿論、この労働は社会的に必要な労働時間(平均的労働)であるかぎりでは価値形成的であると見なされます。

労働と同様に「原料や生産物もまた本来の労働過程の立場から見るとはまったく違った光のなかに現われ」(原書 204 頁)るとされ、「原料はここではただ一定量の労働の吸収物として認められるだけ」であり、「生産物である糸はもはやただ綿花に吸収された労働の計測器でしか」(同前)なくなります。「もし 1 時間に 1<sup>2</sup>/<sub>3</sub> ポンドの綿花が紡がれるならば、または 1<sup>2</sup>/<sub>3</sub> ポンドの糸に変えられるならば、10 ポンドの糸は、吸収された 6 労働時間を表わしている」(同前)といった具合です。

ここでは価値が問題なので、原料は労働に具体性を与えるものとしてではなく、抽象的人間的労働の単なる吸収物と見なされます。「吸収」というのは、量だけ

が問題になる抽象的人間的労働にふさわしい言葉であるとの声がありました。

さて、マルクスは段階を追って考察します。

#### (1) 労働力の日価値に相当する労働時間の場合

以前、労働の日価値が 3 シリング(対象化された 6 時間労働)だと想定されました。これに合わせて 6 時間労働が行なわれるとすれば、どうなるでしょうか?

紡績工は 6 時間で 10 ポンドの綿花を 10 ポンドの糸に変え、紡績過程中に綿花は 6 労働時間を吸収します。つまり綿花は紡績によって 3 シリングの価値がつけ加えられこととなります。

すると生産物である糸の総価値はどうなるでしょうか? 10 ポンドの糸には 2<sup>1</sup>/<sub>2</sub> 労働日が対象化されていることとなります。生産手段の綿花 10 ポンドと紡錘 1 個分には 2 労働日が対象化されており、それに 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub> 労働日(6 労働時間)が加えられるからです。10 ポンドの糸の価値に相当する価格は 15 シリングになります(糸 1 ポンド当たり 1 シリング 6 ペンスです)。

これを前貸した資本の価値と比較してみます。生産要素である生産手段のために 12 シリングが、労働力に 3 シリングが前貸され、その合計は 15 シリングです。生産された糸の価格 15 シリングと同じです。「生産物の価値は前貸された資本の価値に等しい。前貸された価値は増殖されておらず、剰余価値を生んでおらず、したがって、貨幣は資本に転化してはいない」(原書 205 頁)こととなります(下表をご覧ください)。

それだったら何のための資本の前貸かということになります。マルクスは、資本家たちの様々な繰り返しを並べています。自分たちは、「節欲」し、資本投下という「役だち」を果たし、監督労働という「労働」もしたのに、利潤が得られないのはどういうことか、と。ここにある利潤を正当化する理屈は、より巧妙な形で今日でも再現されている、との声がありました。

15 シリングの資本は 12 シリング・プラス 3 シリングという形で与えられた価値が加算されていますが、「このように既存の価値をただ単に加算することからはけって剰余価値は生まれえない」とマルクスは述べています。この箇所注 13 があり、「これ(加算—

#### ◎半労働日(6時間労働)の場合

資本の前貸		綿糸10ポンドの価値	剰余価値 (B マイナス A)
生産手段	綿花10ポンド = 10シリング 紡錘1個 = 2シリング 計12シリング(2労働日)	生産手段部分 = 12シリング	
労働力	労働力の日価値 = 3シリング(0.5労働日)	労働力が形成した価値 = 3シリング	
計15シリング(2.5労働日)(A)		計15シリング(B)	ゼロ

一引用者)は、すべての非農業労働の不生産性に関する重農学派の学説の基礎になっている根本命題であり、また、この命題は経済学者たち——専門の——にとつてくつがえすことのできないものである」(原書 206 頁)とあり、重農学派の一人リヴィエールの著作から引用がなされています。

重農学派は、生産的なのは農業部門のみであって製造業の労働は不生産的であるとししました。彼らにおいて生産的とは純生産物(プロデュイ・ネ)すなわち剰余価値を生み出すという意味であり、リヴィエールによると、製造業では労働生産物の価格は生産要素の価値が加算されるだけで価値増殖しない、これに対し農業では「掛け算」(価値増殖)が行なわれるというのです。

彼らは、農業では生産による素材の増大が文句のない形であられ、生産当事者の生活資料を上回る純生産物をもたされるので、農業部門においてのみ「掛け算」が行なわれると考えた、との説明がありました。

## (2) 労働力の価値が半労働日(6時間)だということは一日(12時間)労働することを妨げない——労働力商品の独自の使用価値

資本家は実際家であって、あれこれの繰り言を弄しながらも、やるべきことを心得ています。

「労働力の日価値は3シリングだったが、それは、労働力そのものに半労働日が対象化されているからである。すなわち、労働力の生産のために毎日必要な生活手段に半労働日がかかるからである。しかし、労働力に含まれている過去の労働と労働力がすることのできる生きている労働とは、つまり労働力の毎日の維持費と労働力の毎日の支出とは、二つのまったく違う量である。前者は労働力の交換価値を規定し、後者は労働力の使用価値をなしている。労働者を24時間生かしておくために半労働日が必要だということは、けっして彼がまる一日労働するというのを妨げはしない。だから、労働力の価値と、労働過程での労働力の価値増殖とは、二つの違う量なのである」(原書 207 頁)。「決定的なのは、この商品の独自の使用価値、すなわち価値の源泉でありしかもそれ自身がもっているよりも大

きな価値の源泉だという独自の使用価値だった。これこそ、資本家がこの商品に期待する独自の役だちなのである」(原書 208 頁)

第4章第3節「労働力の売買」で「価値の源泉であるという独特の使用価値」を持っている労働力という商品を見出し、資本家がこれを購入することが決定的であることが仄めかされましたが、その意味が明らかになります

労働力の日価値は3シリングで、それは半労働日(6労働時間)に相当しますが、そのことは一日12時間労働をすることを妨げません。資本家は用意周到に12時間分の生産手段を作業場に揃えています。すると20ポンドの綿花は12労働時間を吸収して20ポンドの糸になります。

「この延長された労働過程の生産物を考察してみよう。20ポンドの糸には今では5労働日が対象化されている。4労働日は消費された綿花量と紡錘量とに対象化されていたものであり、1労働日は紡績過程のあいだに綿花によって吸収されたものである。ところが、5労働日の金表現は30シリング、すなわち1ポンド10シリングである。だから、これが20ポンドの糸の価値である。1ポンドの糸は相変わらず1シリング6ペンスである。しかし、この過程に投入された商品の価値総額は27シリングだった。糸の価値は30シリングである。生産物の価値は、その生産のために前貸しされた価値よりも9分の1だけ大きくなった。こうして、27シリングは30シリングになった。それは3シリングの剰余価値を生んだ。手品はついに成功した。貨幣は資本に転化されたのである」(原書 208 頁)

この記述を表にしましたのでご覧ください。生産物の価値は生産過程に投入された商品の価格総額(前貸しされた資本価値)27シリングですが、生産物(20ポンドの糸)の価値は30シリングになっています。3シリング増大しており、これが剰余価値になります(下表のとおり)。

価値増殖は流通局面で不等価交換が行なわれたからでしょうか?

「問題の条件はすべて解決されており、しかも商品交換の法則は少しも侵害されてはいない。等価物が等

### ◎1労働日(12時間労働)の場合

資本の前貸		綿糸20ポンドの価値	剰余価値 (B マイナス A)
生産手段	綿花20ポンド = 20シリング 紡錘2個 = 4シリング 計24シリング (4労働日)	生産手段部分 = 24シリング(4労働日)	
労働力	労働力の日価値 = 3シリング(0.5労働日)	労働力が形成した価値 = 6シリング (1労働日)	
計27シリング(4.5労働日)(A)		計30シリング(5労働日)(B)	3シリング

価値と交換された。資本家は、買い手として、どの商品にも、綿花にも紡錘量にも労働力にも価値どおりに支払った。次に彼は商品の買い手がだれでもすることをした。彼はこれらの商品の使用価値を消費した。労働力の消費過程、それは同時に商品の生産過程でもあって、30 シリングという価値のある 30 ポンドの糸という生産物を生みだした。そこで資本家は市場に帰ってきて、前には商品を買ったのだが、今度は商品売る。彼は糸 1 ポンドを 1 シリング 6 ペンスで、つまりその価値よりも 1 ペニーも高くも安くもなく、売る。それでも、彼は、初めに彼が流通に投げ入れたよりも 3 シリング多くそこから取り出すのである」(原書 209 頁)

資本家は流通部面で生産要素を価値どおりに買っています。等価交換の法則が貫かれています。それなのにどうして剰余価値が生み出されているのでしょうか？

まさに労働力商品の独自の使用価値にこそ秘密を解くカギがあります。労働力には価値形成という使用価値があります。先に見たように、6 時間労働で 3 シリングの価値が形成されます。これは労働力の日価値 3 シリングと同額です。3 シリングが労働者に支払われているので、労働者が 3 シリングの価値を新たに生み出したとしても資本家には儲けが生じていません。労働が 6 時間延長されると 12 時間労働になり 6 シリングの価値が形成されることになりませんが、労働力の日価値が 3 シリングのままなので、これと 6 シリングとの差が資本家の儲けになったという訳です。これが剰余価値の正体なのです。

### (3) 「貨幣の資本への転化は、流通部面のなかで行なわれ、そしてまた、そこでは行なわれない」とは？

ここにきて第 4 章第 2 節で発せられた設問、「資本は流通から発生することはできないし、また流通から発生しないわけにもゆかないのである。資本は、流通のなかで発生しなければならないと同時に流通のなかで発生してはならないのである」(原書 180 頁)への回答が与えられています。

「この全経過、彼の貨幣の資本への転化は、流通部面のなかで行なわれ、そしてまた、そこでは行なわれない。流通の媒介によって(流通の媒介によって行なわれる—新日本出版訳)、というのは、商品市場で労働力を買うことを条件とするからである。流通では行なわれない、というのは、流通は生産部面で行なわれる価値増殖過程をただ準備するだけだからである。こうして、「最善の世界では万事が最善の状態にある」[“tout pour le mieux dans le meilleur des mondes

possibles”] ののである」(原書 209 頁)

この「この全経過、彼の貨幣の資本への転化は、流通部面のなかで行なわれ、そしてまた、そこでは行なわれない」の「流通部面」または「流通」をどう理解するかで意見が対立しました。一方の意見は、流通部面(流通)とは資本の一般的定式の第一局面 (G-W) と見なすべきだというもの、もう一方の意見は、それは第一局面の G-W と最後の局面 W' -G との間にある生産過程を含む全局面すなわち広義の流通過程の意味である、というものでした。この違いが次のような解釈の違いとして現われました。

前者の意見は次のようなものでした。

＜剰余価値の形成そのものは生産部面で行なわれるので「流通部面で行なわれない」ことは自明である。しかし、この生産部面で行なわれる価値増殖を準備する段階である第一の流通局面が重要である。この局面では、自ら価値増殖するという独自の使用価値を持つ労働力商品が購買されるのであり、この流通行為が決定的である。全過程には剰余価値が含まれる商品の販売という第二の流通局面があるが、この流通行為それ自体からは価値変化は生じない。価値の源泉である労働力商品の購入という流通行為こそ、マルクスが念頭に置く貨幣の資本への転化が「流通部面のなかで行なわれ(る)」の意味である＞

これに対し、後者の意見は次のようなものでした。

＜マルクスは「全経過」と言っており、ここでは全局面が総括されている。「貨幣の資本への転化」が、「流通部面で行なわれない」というのは、それが生産過程で行なわれるという意味なのでそのとおりである。問題なのは「流通部面のなかで行なわれ(る)」という場合の流通(部面)には、労働力の購買が行なわれる第一の部面だけではなく、剰余価値の実現でもある商品の販売がなされる第二の流通部面も含むものでなければならない。だからここでの流通(部面)とは全局面(広義の流通過程)であると解される。このように見なせば「流通部面で行なわれ(る)」の意味がよく理解できるものとなる＞

マルクスのレトリックへの彼自身の説明をどう理解するかという、いささか消耗な議論になってしまったのですが、全経過の事理解には両者の間に違いがないということを確認して議論を終えました。

最後の議論に時間を取られてしまい、残りを検討する時間が足りなくなりました。次回は、本節の残った部分を終えてから、第 6 章「不変資本と可変資本」に入ります。(雅)

